

おひるねめがね

ヴーン

新しいエアコンが、理科室にぬるい風を送ってる。わたしはちょっと考えてから、スイッチをOFFにした。

窓を開けると、エアコンより涼しい風が入ってくる。外の景色は、ほんの少しだけ黄色っぽく感じられるね。まあ、気のせいもちよつとはあるんだろうけど。

それにしても

「『ユリコはここで、少しだけ待ってて』かあ」
思わず、考えてることがこぼれていった。ほのかつてば、せつかくの土曜の部活だったのに、なあにやっ
てんのかなあ？

考えながら目線を少し下に下げた。運動部が校舎のまわりを走ってる。あ、美墨さんだ。

「いつしょじゃ、ないんだ」

言っちゃった瞬間、手のひらで口をおさえて、まわりをきよるきよる。ああ、よかった。だれもいないや。

いけないなあ、わたしも。ほのかが聞いてたら大変だよ。気にしちやっつてしょうがないもん。

でもさ。

「ちよつとはね」。化学部も見て欲しいんだよね」
ううん、見てくれないわけじゃないんだ。でも、やっぱり2番目なんだよね。なにがなんでも1番で、なうんて言わないけど。けどさ。

ぼふっ

机に置いてた実験用の綿に、わたしは顔をうずめた。まずいよね、これ。ほのかが来る前に、頭ん中片付けなくちゃ。

でも

「おっそいなあ、ほのか」

「ただいまあ」

茶色の紙袋を抱えて理科室に戻ってきたわたしを迎えてくれたのは、しゅんとした部屋だった。

あら？って思ってた奥のほうを見たら ああ、窓際の机ですわちゃってるわ。

しかたないか。すぐ戻るって言うておいて、こんなに時間経っちゃってるんだものね。

「ごめんねユリコ、ちよつと後輩に捕まっちゃって。『雪城先輩は、私の憧れです！』ですって。そんないいものじゃないのに あ、あら？」

近づいていくと、ちっちゃくて、ゆっくりしたりズムの息づかいが聞こえてきた。机にのせた頭は窓のほう向いてるけど、その上に黄色っぽい葉っぱがいくつか積もってるわ。

「ユリコ？」

そおつと、耳元で呼んでみたけど返事がない。

「えいっ」

ほつぺたを、つん、ってつついても、指でちよつとかくだけ。またゆっくり、息の音だけ聞こえてくる。

疲れちゃってるのかな？ 最近、化学部の活動

はユリコに半分まかせちゃってるものね。

「たまには、ゆっくり休んでもらいましょ」

うん。今日はわたしたちだけ。来週やる実験の準備だけだしね。それじゃ、持ってきた材料を机に並べ

「きゃっ!？」

目の前が、いきなりくるつと回った。足がなにかに引っかかったんだわ。このままだと倒れ じゃなくて、荷物っ！

「えいっ!!」

机の上に紙袋を投げ上げたのと、体が床にぶつかるのが同時だった。

思わず声上げるところだったけど まだユリコの

寢息が聞こえるわ。ふう、ぎりぎりセーフね。

足元にあつた純水タンクをどかして、制服のほりを払いながらわたしは立ち上がった。ユリコね？もあ、こんなとこ置きっぱなしなんて、実験中だったら大変よ。起きたらひとこと言わなくちゃ。

それにしても、さっき投げちゃった荷物は壊れなかったかしら　　って、あら？

わたしは、机の上にはら撒かれた中からひとつ、取り出した。実験用に買ったものとは関係ない、ここにあるはずのないもの。

「ヘアバンド？」

口にしてから、あつ、と思った。

そうそう。さっきクラスの夏子さんから、押し付けられちゃったんだったわ。なんでも、ひかりさんがいい素材だから、一度これ付けて写真撮ってきて欲しい、って言うて。断つただけど、付けるだけでも付けさせてみて、って　　結局、これだけもらつ

ちゃつたのよ。

なにか出つ張りがついてる、へんなヘアバンドよねえ。でも、見てたらなんだか顔が緩んじやうわ。

これ押し付けてきたときの夏子さんつたら、声変えちゃつて、『いい女は、変身するものよあ』なんて言うんだもの。思い出しただけで吹き出しそうになつちやうなあ。なんたつて、変身の経験ならわたしたちの方がずつと多いものね

「ん　　ほのか　　」

いつけない。起こしちゃつたかな？　　じつと耳

を澄ましてると、また寢息の音。ふう、大丈夫みたいね。あ、でもちよつと寝返りうつたみたい。顔がこつち向いてるわ。

なんだか、見てるとほつとする顔よね。なぎさやひかりさんとはまた違う寝顔よ。

「変身　　」

口から勝手にこぼれちゃつた言葉で、わたしはちよつとぼーつとなつた。　　ああ、手が勝手にユリコの

頭に向かって行くわ。手に持ったヘアバンド、そのまま頭にそおっとつけて うわぁ♡

ヘアバンド姿のユリコを見てたわたしの足が、そのまま理科室の外に向かっていった。なんだか、少し駆け足になってるみたい。

「夏子さんたち、他にも持っていないかしら？」

「ん？ほのか？」

ぼーっとしながら目だけあけてみたけど、だれもいないや。あゝあ、幻聴が聞こえるよつになっちゃ、おしまいだよねえ。

でも、ま、起きて待ってるのも疲れるし。このまま眠ってようかな

「ふぁ あ あ？」

なんか、頭のわきがムズムズするなあ。

さわってみたら、なんかある。頭の形にそって、耳

から耳までぐるーりと。

「ヘアバンド？」

あたし、こんなのつけてたっけ？ って、だれもいなんだもん。わたししかないよね、こんなのするの。

カサカサカサ

すう、と風が吹くのとっしょに、なんか頭の上がちよつとガサガサいってる。ヘアバンド、おつきすぎたのかな？ 自分で言うのもなんだけど、センスいい方じゃないからなあ いいよ、わたしは。ほのかの引き立て役でもさ。

なんて。ほんとに目の前で言ったら怒られちゃうけど、けど

「ふ、ふわぁあ っ」

だゝめ。なんかもう、眠くって。

もう一眠り、おやすみい

「失礼しまあす」

放課後の理科室をノックして、私はとびらを開けた。べこっ、って頭下げながら、

「すみません、ほのかさんは」

「そこまで言っただけで目を上げたのだけども、あら？」

「だれもいない？」

きよろきよろ回り見回しても、理科室の中はただ机が並んでるだけ。おかしいわ、だって

今日はあかねさんがお出かけで、タコカフェはお休み。遅く帰ってもいいよ、って言われたのを登校途中のなぎささんたちに話したら、ほのかさんがさそってくれたのよね。それじゃあ、化学部に遊びに来ない？って。

今日の化学部は準備の日で、ほのかさんと3年のひとの2人しかいないから、わたしが遊びに行っても大丈夫なんだって。なのにだれも

ん？

「う、ううん」

奥の机のうえで、ころんってなにか転がった。近づいてみたら、前に会ったほのかさんのお友だち、ユリコさんだわ。机で眠ってたんだ。

それにしても、頭につけてるの、なんだらう？へアバンドみたいだけど、頭の上に茶色い三角のがふたつ、ぴよこん、って立ってるわ。まるで、キツネの耳みたいに。

先輩なんだけど、なんだけど、なんだらう、見ると広がって、この気持ち。

「なんか、かわいい」

「あは、そう言ってくれると助かるわ」

私は思わずびくっとして、その場で飛び上がった。やった。

そおつと振り向いたら、とびらのところで、ほのかさんが笑ってる。

「ひかりさん。ちよつと、つきあってくれる？」
「にっこり笑ってるほのかさん、なんだけど」

なんとなく、へんな、感じ？

自分の感じが正しいってわかったのは、その10分後だった。

「ん？」

目が薄く開いた。二度も眠ってるのに、ぜんぜん眠気が取れないなあ。やっぱり、陽気のせいかな？

閉じかけの目で回り見てみたけど、あたりはいつも通り、理科室の机が並んでるだけ。ほのか、まだ来てないのか。もう、帰っちゃうぞ、こら。

「しょうがない、もっかい眠るか。あれ？」

まくら代わりの腕を組みなおそうとしたら、なんかへん。体にふわっ、ってまとわりつく、っていうか。ああ、シャツか。

ピンクのフリルつきなんて着て来てたんだ、わたし。よく注意されなかったよねえ。

ま、いつか。おかげで腕に頭のせても柔らかいし。それじゃ、もちよっとだけ寝ますか

「土曜に早上がり、なんて久しぶりだなあ。」

ラクロスの試合からまだ日が経ってないから、今日の練習は軽くおしまい。明日の日曜はしっかり休んで、次の試合に向けてまたがんばらなくちゃね。

さて、と。今日はたしか、ひかりが化学部に行ってるんだっけ。まあ、ほのかはともかく、ユリコがいるから大丈夫だろうけど。ちよっと、寄ってみようかな？

そんなこと考えながら、あたしはユニフォームの袋持って教室に向かった。カバンと一緒に重いけど、置きっぱなしにはできないもんね。

んあ？

「うっわあ、かわいいっ」

「ほんと。これは着せ替えがいがあるなあ〜」
「なんか、騒がしいなあ。このへん、部屋とかなかつたはずだけど」

「でも、もっと似合うのありそうなんだよねえ。それじゃ、次はこれ あ、逃げた!」

逃げた? なに言ってる うわっ!

目の前、あたしのクラスから白いものがひょこつと飛び出してきた。な、なによいったい?

「ひ〜ん、なぎささあ〜ん!!」

って、あたしのこと呼びながら、抱きついちゃったよ。ちよつと、これって!?

「ひ、ひかりじゃない。あんた、下着のまんままでなにしてる」

「や、やっぱ〜」

目を上げたら、とびらからまた人が出てきた。うちのクラスの京子に 夏子、って、ちよつと待てこらっ!

「あ・ん・た・た・ち!!」

あたしは、ひかりにジャージかぶせて、そのまま教室に飛び込んだ。

床いっぱいの衣装の山にくらっ、ときたけど、両腕広げて、なんとかふたりとも よし!

「捕まえたツ! さあ、ふたりでひかりになにしたのか、教えなさいっ!!」

まあ、大体わかるけどさ、3年生が、1年つかまえてひん剥むくなんて!

さーて、どう言いわけしてくるか、って思ってたから、夏子がぼそぼそつ、て言った。

「いや、これはほら、雪城さんが」

「ほのかが、なんだってえ?」
思わず、捕まえてる腕に力が入っちゃっよ。言いわけのネタがないからって、ほのかダシにするか、あんなは!

「だから、その 服貸してあげる代わりにさ、この子マネキンにしている、って」

「んだとあ〜!」

その瞬間、頭んなかがまっ白になった。

ウソじゃないよ、これ。でなきや、ひかりがとっ捕まってるわけないんだから。

「あ、な、なきささん!?!」

「まってて、ひかり。ちよっと、ほのかとっちめに行ってくるっ!!」

教室のとびら抜けて、壁にぶつかりそうになりながら、あたしは駆け出した。全力で。

だから、背中声を聞く余裕なんてなかったんだ。

「置いてかないでええっ!!」

「うふふふ♡」

わたしは思わず、笑いを抑えられなくなっちゃった。

目の前には、すっかり着替え終わったユリコ。制服

のブラウスとスカートはきちんとたたんであるし、あ

とは、最初につけたヘアバンドをこれに替えれば

「ほのかっっ!!」

ってときに、やってくるのよね。なきさは。

「しーっ、静かに」

口元に当てた手を、なきさが思いつきりつかんできた。ものすごい顔で、わたしをにらみつけてる

あら？

なきさの目が、濡れてる。

「あたしはねえ、ほのか信じてんだよ?」

そのままうつむいて、頭をわたしの胸に押し付けてきた。

「ちよっとヘンなことしても、悪いことはしないっ

て。それが、なによ! 服のために、京子たちに

ひかり売ったって!?!

あたしは、あたしは情けないよ、ほのか

「ごめん」

まいったわ。殴られるより、よっぽど痛いもの。

「売るなんて、そんなつもりじゃなかったのよ。だ
けど、ほら、ひかりさんって、あまりおしゃれし
ないでしょ？」

夏子さんたちに、ちよつといじつてもらうのも、い
いかもしれないなあ、って思つて」

言い終わつてしばらくしたら、なぎさがすつ、と
胸から離れた。ハンカチで顔ぬぐつて、こつちを向
いた顔は、にっこりしてるわ。

「んで、本音は？」

「うゝん えへ」

その瞬間、わたしは頬が痛くなつた。なぎさが両
方の頬をつまんで引つ張つてるんだ。

「『えへ』じゃないって！ 京子たちもそりや普段
はいい子だけど、衣装がからむと目の色変わっちゃ
うんだから。まして、相手はひかりだよ？ 飢えた
狼に羊投げ込んだみたいだったんだからね！」

ぎゅーつ、と引つ張られて痛いけど、なぎさの言葉の
方がもつと痛いわ。そこまで考えてなかつたなあ。ひ

かりさんには、悪いことを って、ちよつと待つて。

「にやぎひや、ひかりしゃんは??」

とたんに、痛みがなくなつた。なぎさの目が、ど
んどん大きくなつてく。

「しまったあつ、置いてきちゃつたつっ!!」

やっぱり。こつしちやいられないわ。

わたしはなぎさの手を掴んで、理科室を飛び出し
た。責任持つて、助けに行かなきゃ

「ほのかさあゝん！」

そのとき、ろうかの向こうから、小さな声が聞こ
えてきた。

「ひどいです、ほのかさん。わ、わたしっ !!」

ろうかを走つてきたひかりが、ほのかを両手でた
たいてるの、あたしは横で、ぼーっと見てた。

よっぽど恥ずかしかつたんだろつねえ。ほのかも

困った顔でただ叩かれてるし。でも、あたしはなんだか、ほっとしたよ。

「あー、はいはい。とりあえず、最悪の事態は避けられたから。ほのかも反省してるし、ここはあたしの顔に免じて許してよ。ね？」

うつうつ、って言葉が見えるくらいの感じで落ち込んでるひかりに、ほのかがごめん、って謝ってる。

「だけど、ほのかの困り顔もそこまで。いきなりっこり笑い出しちゃった。」

「でも　とつてもかわいいわ。ひかりさん♡」

「ぱっ、と指さしたところ、理科室のガラスに映った姿を見て、ひかりが真っ赤になった。気が付いてなかったんだね、自分がなに着てるのか。」

「え、あ、あの　」

肩や首周りがひらひらしてる白のブラウスに、三段の色違いフリルスカート。腰のあたりに大きなチェックのリボンなんてつけちゃって、まあ。

「看護師さんとか巫女さんとか、ヘンに狙ったのは

やめて、って言うておいたのよ。これでも」

ひかり、かわいすぎだもん、襲われちゃうんじゃないか、って、さっきはあたしも血の気が引いたんだけどね。一応、最後の理性だけはあったんだなあ、京子たち。

「これだけ似合うんだもの。いつかまた、ふたりにいじられてみない？　こんどはちゃんと、監視つきにするから　」

「あゝあ、今度はひかりが困り顔になっちゃった。反省、ちゃんとしてるのかなあ？」

「『プリキュアの、美しき、たましいが』か　」
あたしが小声でこっそり言ったら、目の前の後姿がいきなり、思いっきり振り返ってきた。

「なゝに言いたいのかなあ？　な・ぎ・さ？」

笑い顔だけど、眉毛だけがびくびく動いている。わかってんなら、ちゃんと反省しなさい、っての。

「べつつにいゝ？　んじゃ、ひかり売ってまで借りてきた服っての、見せてもらおうじゃないの。ほのか」

目を開けたら、世界が変わってた。

理科室のはずだったのに いや、机とか棚とかはちゃんと理科室なんだけど、なにかが違う。なにか、なに あ、そういえばメガネしてないわ。つけなきゃ。って、

「ちよつとあ、なによこれえっつ!!」

なんかふわふわしたものが顔に当たると思ったならなに、このすっごいフリフリは!?

肩はふくらんでるわ、胸はひらひらのエプロンだわ、長いスカートに、中はもこもこって これ、ペチコートお!?

「わたしは人形か、ってーのっつ!!」

いつの間に や、待てよ? 下着まで変えられてんのに、気づかなかったってこと?!

っていうことは ああつ、やっぱりいたっ!

「ほのか! 一服盛ったわね!!」

となりの机に、ほのかがいた。後ろには美墨さんと、ちいさな子 ? ああ、ひかりちゃんか。おしゃれしてるけど、なんか恥ずかしそうにしてるなあ。

「やあねえ、人聞きが悪いんだから。ちよつと、匂いかいでもらっただけじゃない」

にっこり笑ってる顔のなかで、口元だけがちよつとつりあがってる。それって、ほんとに盛ったってことおっ!?

「化学部長でしょうが、ほのかはっつ!! 自分のことに薬品つかうなっつてば!」

「ん、一応、わたしの場所以外のおくすりは使っていないわよ」

思わず、がっくり膝ついちゃったよ。ほのか蔵ほのか専用の薬品おきば。なに入ってるのよ、あそこっつて!

「ちよつと、動かないでね うん、これで完成」

ほのかの声ではっ、として思わず手で払ったけど、

ぴよん、って後ろにはねてっちゃった。いけない。呆然としちゃってたよ、わたし。

立ち上がって、ひざのほこり払って すっごく長いスカートにエプロンだなぁ、って思いながら、なんの気なしに窓を見た瞬間、わたしは、氷になった。

カチーン、って。

「ねえねえ、言ってくれない？ 一度でいいから。ねえ、ユリコ♡」

ほのかの声が、遠くから聞こえる。

そうか。ふくらみ袖に裾の広がった黒いワンピースと、長いエプロンドレス。白の蝶タイに頭のヘッドドレス。

窓に映った自分の姿見て、なんとなくわかった。ほのかが、なにやらせたいのか だから、わたしは思いっきり深呼吸してから、みんなに向き直った。

そして、腰から思いつきお辞儀して、言っちゃったんだ。

「おかえりなさいませ、お嬢様」

一番奥にいた、ひかりちゃんに向かつて。

「え？ わ、私!？」

ひらひらの服で、どきまぎしてる。ほんと、かわいいなぁ。これ見られるんなら、お辞儀したって損じゃないよね。

で・も。

「なにやってるのです、ほのか！ お嬢様のお戻りですよ!!」

「え？ きゃっ!」

とっさに、わたしはほのかを捕まえた。

「メイドがこのような服でお嬢様をお出迎えだなんて、メイド長として許せません！ すぐにお着替えなさいっ!!」

そのままわたしは、ほのかのスカート、ぐいっと引っ張った。

「ちよ、ちよっとユリコ、なりきりすぎっ!! あ、なごさ、助け」

ほのか、考えあまーい。だつてさ、

「自業自得でしょーが。剥かれたひかりの気持ちも、
ちよつとは味わつときなつて」

美墨さん、わたしがほのか捕まえた瞬間に、指で
サイン出してくるんだもん。

『やつちやえ！』 っで感じで。

あゝあ、これじゃわたしも言えないよねえ。化学
部が1番なんてさ。でも、いつか。

「両方とも、楽しめばいいのよね。うん♡」

美墨さんが笑いこらえてる。ひかりちゃんも、ちよつ
と困つて ても苦笑いしてる。

それじゃ、ぐいっ、と

「わたしは、楽しくな〜いつ!!」

—おしまい—